

のつばみ（小）の数，つばみ（大）の数，開花数および落下数を観測した。

A：ひと枝の落花率

a：低気圧通過前のひと枝の開花数

a'：低気圧通過後のひと枝の開花数

とし、

$$A = \frac{a - a'}{a} \times 100$$

であらわしたものである。この落花率の平均をとると、ひとあらし55.6%の値を得た。地形的に開放度の大きい

ところ、高度の大きいところは、落花率が高い。また樹木が群をなしているところは落花率が少ないようである。さらに、風速の程度、強風の吹続時間のほかに、満開後の経過日数も関係があるようだが正確なことは、今後の詳しい調査にまたねばなるまい。

参考文献

笠村幸男：大分に現われる南よりの冷氣流について
研究時報 7.

一口絵写真説明一

1963年1月豪雪で陸の孤島と化した山形県小国町の表情

伊 藤 亀 雄*

“今年もまた暖冬で終るのかな”と思わせるような穏やかな日が続いたのも1月15日までだった。16日から天候は一変して寒さが頃に加わり、連日雪が降り続いた。特に月山、朝日連峰の南部では1月25日9時の積雪が250cmを越えるに至った所が多かった（図参照）。

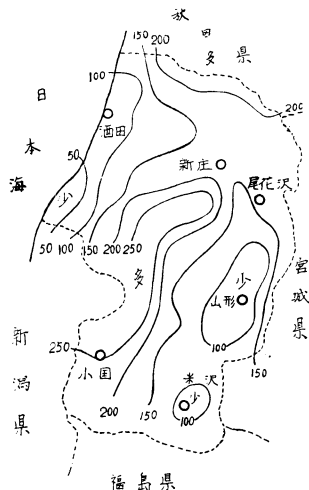
今回の雪の特徴は、いわゆる里雪型の降り方をしたことで、いつも雪の多い米沢や尾花沢などの内陸部がほぼ平年並であるのに、沿岸部の酒田方面は1940年に次ぐ稀有の大雪となった。また比較的短期間に集中的に降り、かつ気温が低かったために雪の密度が小さかった。したがって、降水量の割に積雪の深さが大きくなったのも1つの特徴であろう。

このため、米沢と坂町を結ぶ米坂線は、1月24日から全く不通となり、2月19日の開通まで1カ月近くにわたって大混乱に陥ってしまった。

特に小国町では孤立状態が長引いたため、医薬品をはじめ青鮮食料品が欠乏し、町民の日常生活にも次第に不安の色が濃くなってきた。そこで東北電力株式会社と自衛隊が困難を冒してヘリコプターによる連絡および輸送

を行なって、辛うじて急場を凌ぐ有様であった。

口絵の写真は小国地区農業気象観測所の小関吉雄氏が提供されたものの一部で、雪国の実態を如実に示す好資料であると思う。（1963. 2. 22）



山形県内積雪分布図（1963年1月25日9時）

* 山形地方気象台